世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

ノエル・ペリが残した近代の文化交流：オペラから能楽への軌跡

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂東, 愛子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/812

ノエル・ペリが残した近代の文化交流

―オペラから能楽への軌跡―

坂東愛子

はじめに

明治維新以降、外国との交流が本格化し、日本を訪れた西洋人によって能楽は、文学的な価値が認められ、欧米に広く紹介された。その初期の能楽研究は、バジル・チェンバレンやアルジャーノン・ミットフォードなどイギリス人を中心に始まり、アメリカ人のアーネスト・フェノロサやエズラ・パウンド、そしてフランス人であるノエル・ペリなどが続いた。

ノエル・ペリは、初めて能楽を仏訳し、また能楽に関する多くの論文を残した先駆的な研究者で、フランス人のガストン・ルノンドーやポール・クローデルらに多大な影響を与えた人物として知られている。しかしその一方、彼は日本に滞在した約一七年の間に、日本人によるオペラ初演および能楽文学研究会で活躍するなど、日本の近代文化の発展に大きく貢献したが、オペラ初演のことは能楽界で知られておらず、能楽文学研究会での活動はあまり注目されてこなかった。

本稿では、まずノエル・ペリの人物像として、一般的な略歴を挙げ、さらに、新たに得られた知見に基いて、日本人によるオペラ初演、能楽文学研究会における活動、ペリ追悼記念会、というペリが残した三つの文化交流について紹介したい。

1．ノエル・ペリの人物像

ノエル・ペリの生涯については、古川久の『明治能楽史序説』[1]や杉山直治郎の「ノエル・ペリーの生涯と業績」[2]に詳しく、これらを典拠に彼の略歴を紹介する。（参照、【表1】滞日以降のノエル・ペリの主な活動）

ノエル・ペリは、慶応元（一八六五）年八月、フランスのヨンヌ県に生誕し、税務吏であった父の転勤に伴い転学の多い少年期を過ごした。その後海外宣教師を志し、セーヌ県の神学校よりパリ外国宣教会神学校に進学

Le Nô/Peri, Noël.
（Tokyo : Maison Franco-Japonaise, 1944）より転載

表1　滞日以降のノエル・ペリの主な活動

滞日期間		滞在地	職　業	主な出版・教育・研究活動
1889年	明22	横浜→東京→名古屋		日本語学習を始める
1890年	明23	松本	司祭	
1892年	明25	東京→松本	孤児院管掌→司祭	
1896年	明29	東京	司祭	東京へ召還
1898年	明31		司祭	邦文雑誌『天地人』創刊、書店「三才社」創立
1899年	明32		司祭・東京音楽学校嘱託教師	オルガン・和声法・作曲・フランス語を教授する
1901年	明34	東京→水戸	司祭転任・同学校嘱託教師	『天地人』廃刊、「三才社」経営辞職
1902年	明35	水戸→東京	司祭辞職・同学校嘱託教師	外国宣教会脱退、以後日本研究に専念
1903年	明36	東京	東京音楽学校嘱託教師 暁星中学校ピアノ教師	メートルとの出会い、能楽研究へ 奏楽堂にてグルック《オルフォイス》を初演
1904年	明37		東京音楽学校嘱託教師解職	雑誌『能楽』、能楽文学研究会による研究活動
1906年	明39	東京→上海	新聞記者	
1907年	明40	ハノイ	フランス極東学院研究員	第1回日本出張
1909年	明42			学院報にて日本研究の論文発表を開始
1913年	大2			第2回日本出張
1915年	大4			第3回日本出張
1918年	大7			第4回日本出張
1920年	大9			第5回日本出張

し、音楽教師の資格を取得している。卒業後はパリ外国宣教会に所属し、明治二二（一八八九）年、二十四歳の時に、宣教師として来日した。当初、名古屋・松本などの任務地でカトリックの口頭布教に励んだが、二九年に東京へ召還されたことが、彼の大きな転機となる。

上京したペリは、パリ外国宣教会が聖書を邦訳した『聖福音書』の翻訳事業に携わり、そこで日本語や漢文の優れた読解力および日本文化への理解が高く評価された[3]。その評判から、和仏法律学校（法政大学の前身）の森則義は、日仏協会の前身である「仏学会」における日本人の寄稿文の仏訳をペリに依頼した。すなわちペリは、初めての仏文日本誌である『Revue française du Japon』（邦名『仏文雑誌』）において、三一年に能《橋弁慶》、翌年に、狂言《伯母ケ酒》の解説を翻訳したのである[4]。その後、東京神田で日本初のフランス書籍を扱う書店「三才社」を経営し、邦文雑誌『天地人』の創刊などを手掛け、積極的に日仏交流の場を開拓している。しかし、このような布教の範囲を超えた活動が外国宣教会脱退へと追い込まれることになった。これについては次項で述べる。

明治三五年以降、ペリは、東京音楽学校の嘱託教師として音楽教育に従事する傍ら、オペラに関する活動や能楽の研究活動で成果を残したが、その二年後、東京音楽学校の職を失い、失意のうちに上海へ新聞記者として渡った。翌年、彼の境遇を案じた親友のクロード・メートル[5]によって当時インドシナ連邦ハノイのフランス極東学院嘱託研究員として迎えられ、日本・東洋研究に関する研究論文を学院報に数多く発表した[6]。晩年は、体調を崩しながらも五度の来日を果たしたが、不幸にも自動車事故に遭い、大正一一（一九二二）年六月、ハノイの地にて死去した。

2．日本人によるオペラ初演

明治二九年以降、邦文誌『天地人』において音楽会評を執筆していたペリは、次第に日本の音楽界でその実力が認められ、三二年一一月三一日付で東京音楽学校の嘱託員としてオルガン教師となった。三五年には、オルガンのほか和声学も担当し、三七年には、作曲・楽式も教

資料1　明治三二年度年報　職員の項（東京藝術大学音楽学部大学史史料室所蔵）

廉太郎ニアノ九月十八日長崎活水女學校卒業生下村芳子ニ英語十一月三十日佛國巴里府神學校卒業生佛國人ノーエル、ペリーニオルガン、十二月十六日本校師範部卒業生吉田信太ニ唱歌等即チ之ナリ

資料2　明治三五年度年報　職員の項（東京藝術大学音楽学部大学史史料室所蔵）

嘱託員ノ進退ニ関スル事項ハ四月十日ノエル、ペリーニオルガン及和聲學ノ授業ヲ嘱託ス同月十五日菊池みちニ英語高橋勢以ニ

えるようになった。彼の音楽教育へ傾けた情熱は、自ら授業の為に、教材を作成したことからもうかがい知ることができる。[7] さらに、ペリは、東京音楽学校の学生や卒業生有志で構成された歌劇研究会のオペラ指導も手掛け、日本人によるオペラの上演を初めて実現させたのであった。

明治三六年、歌劇研究会の第一回演奏会が、東京音楽学校奏楽堂で催され、グルック《オルフォイス》をピアノ伴奏による日本語のオペラとして全曲が試演された。[8] 公演において、ペリはオペラの指導を行い、さらに指揮と演出を手掛けた。これは彼の大きな業績であるといえよう。日本語の歌詞は、石倉小三郎・近藤逸五郎・乙骨三郎らが翻訳し、ラファエル・フォン・ケーベルがピアノを演奏し、歌手の柴田環（後の三浦環）や宮脇せんが出演した。[9]

この画期的な上演は、数百人もの日本人や外国人が招待され、みな感嘆させるものであったとのことである。[10] その一人であるフランス人のメーボンによると、オペラの完成度は驚くべきもので、ペリの情熱があれば、パリでフランス人による能の上演も不可能ではないとまで絶賛している。[11] しかし、東京音楽学校におけるオペラの上演は、その後戦後まで、風紀上の問題などから禁止されたのであった。当時、東京音楽学校ではドイツの音楽教育が中心で、ペリは唯一のフランス人教師であり、厳しい立場にあった。彼の弟子であった田辺尚雄は、オペラ上演の翌年に、彼に対する反発からあらぬ汚名を着せられ、東京音

写真１　大学史史料室「青い箱」写真より
歌劇《オルフォイス》
（東京藝術大学音楽学部大学史史料室所蔵）

楽学校を解職させられたと記している。[12]

在職中に、ペリが残したもう一つの功績として、日本人ながら専ら西洋音楽を学ぶ弟子たちに疑問を抱き、日本の伝統音楽に対する価値を説いたことが挙げられる。彼の弟子である作曲家の小松耕輔は、後に能を題材に日本初のオペラとなる歌劇《羽衣》を作詞作曲し、このピアノ伴奏による日本語オペラの手法は、ペリが手掛けた《オルフォイス》の影響を受けたものであった。[13] また田辺は、当時、ペリが謡を謡うことを不思議に思い、さらに自身、日本音楽に興味がなかったことを悔やんでいるが、[14] その後、日本・東洋音楽の先駆的な研究を行った。その功績に直接影響したものではないが、田辺の音楽理論の礎は、ペリから学んだ西洋の音楽理論が生かされたものであっただろう。

3．能楽文学研究会における活動

明治三一年、既に東京に定住していたペリは、『仏文雑誌』における能楽解説の仏訳を手掛けたが、能楽への深い関心は、哲学者であるクロード・メートルに導かれたものであった。三六年、ペリはメートルに連れられ、小石川植物園で演じられた観世流の能《楠露》が初めての観能となった。同年、メートルの自宅に招かれ、池内信嘉と観世清廉と会食の機会を得たペリは、その交流をきっかけに、池内が発起人を務めた能楽文学研究会の会員として、本格的な能楽研究を始めたのである。[15]

能楽文学研究会は、能楽保存を目的にその研究方法を議論すべく、文学や音楽の専門家二十名余りで構成された団体で、当初ペリは唯一の外国人であった。三六年十月に早稲田大学内で第一回が開かれ、その後毎月、矢来倶楽部内にて会員による演説が行われ、時には素謡や番囃子の実演も加わった。ペリは池内からの依頼を受け、第二回の研究会において「能楽に就ての所感」と題して、三十分ほどの演説を行っている。内容は、初めて能を観た際の所感に始まり、詩劇としての能の文学形式の価値の高さを評価したものであった[16]。翌三七年の東京音楽学校を解職となる十一月まで、八回ほど研究会に参加している[17]。

翌年十月の第十一回研究会では、後に新劇運動の先駆者となる島村瀧太郎（後の島村抱月）が「オペラ雑感」と題し、能楽の音楽性の未熟さについて演説したが、その際ペリは、島村とは異なる視点で、オペラと能楽の発達した歴史背景が相違することの重要性を指摘している[18]。

また能楽文学研究会発足以前、ペリと池内の対談によると、池内は、西洋音楽の音階や和声を話題に持ち出し、さらに「貴下の御手に於て能楽の趣味を傷け無い様に、西洋楽器を以つて之れを囃すことを御研究下さることは出来ませんか[19]」とペリに能楽を西洋楽器で伴奏する、いわば和洋合奏の研究を依頼している。この背景には、明治一五年の音楽取調掛による「東西二洋ノ音楽ヲ折衷」の方針から、既に二九年一月の歌舞伎座本興行において和洋合奏による《道成寺》が成し遂げられ[20]、能楽においても西洋楽器との折衷合奏を推進していたことが推察される。

しかしペリは、能楽を歌舞伎と同様に捉えておらず、能楽の音楽性について次のように語っている[21]。

> 能音楽は始めは単調と思つたが、聞くに従つて興味があつて面白く思う…（中略）…西洋の楽器を謡に合はすことは出来ないこともないが、矢張従前の鼓などが適当である。能楽を基として一種別なものを作るのは兎も角とし、能楽は能楽として何時までも昔のままを保持するのがよい…

（大鼓の掛声と音色とは不愉快なりという外人の話ありとのことに就き）

小鼓との調和極く面白し…（中略）…芝居は一度歌舞伎座へ行つたが、面白くないので直ぐ帰つた…

これを読み解くと、能の謡と鼓の関係に調和が生じていることをペリが十分理解していたことが推測できる。当時彼は、自ら謡い拍子をアシラうことをし、それが周囲を驚かせていた。謡を誰に師事したかについては、田辺や杉山らによって調べられたが不明である。もし独学で習得したとすれば、ペリの音楽的才能を示すエピソードとなるだろう。

さらに、議論された能楽の改良問題についても、「改良と云ふ語は結構なれど、能の如き藝術に対しての改良は能の滅亡を意味するに等し。」と意見を述ている。[22] 今まで知られていなかったが、ペリは外国人でありながら、能楽の保存と振興に努めた重要な人物であったことが認識できよう。

明治四〇年にハノイへと渡ったペリは、フランス極東学院にて研究を続け、論文「Etudes sur le drame lyrique japonais (Nô) 1909」を池内や古市公威に寄贈している。古市はフランス留学経験のある工学者で、能楽愛好家であった。彼は、その書評を雑誌『能楽』の「外国人の能研究」（第八巻第七号）に取り上げ、その後、論文の大部分を邦訳し、「能の研究」と題して雑誌『能楽』（第一一巻第一号附録）に寄稿した。四三年六月、研究会の発足七年目を記念した「能楽源流表彰会」において、ペリの論文「Etudes sur le drame lyrique japonais (Nô)」は、広範囲な研究として高く評価され表彰された。並んで、吉田東伍の『世阿弥十六部集』、田中正平の拍子論、久米邦武の謡曲組織の解説も同時に表彰がなされた。

4．ペリ追悼記念会

ペリ没後の翌年、パリで彼の追悼記念会が催された。この追悼会は、東京朝日新聞特派員としてパリに滞在した町田梓楼が発起人となり、メートル・大住舜・藤田嗣治・石本巳四雄を始め、東洋友人会との共同発意で進め

られ、松田道一代理大使の支持のもと計画された。その準備の様子は、協力者の一人である内藤濯の日記にプログラムと共に綴られている。[23]

追悼記念会の内容は、以下のようなものであった。

ペリ追悼記念会　於：パリ地理学協会講堂
大正一二（一九二三）年　三月一八日　午後三時半

1. 東久邇宮殿下の臨席
2. 東洋友人会スネール会長の挨拶
3. 松田道一代理大使の挨拶
4. クロード・メートルによる故人の紹介
5. 発起人町田梓楼による能楽解説
6. オデオン座俳優サイヤールによる《江口》仏訳朗読
7. 能楽《屋島》《花筐》《春日龍神》

出演者　シテ：石本巳四雄
地謡：山田珠樹・内藤濯・辰野隆など
鼓：不明
背景・衣裳（花筐のみ）：藤田嗣治

この追悼会を計画した彼らは、パリの人々に能楽を見せるのだと意気込み、舞台の鏡板は藤田嗣治が老松の書き割りを作った。《花筐》の衣裳は、「松の葉や梅の花や竹の葉を衣裳一面に綾どったうえに金箔、銀箔を隈どってある。」[24]と内藤が記している。能楽の上演では、パリに留学する日本人が黒紋付と袴で、謡と鼓によって舞ったようである。また、フランス人俳優サイヤールがペリの仏訳した《江口》を朗読し、能楽の世界が紹介された。

追悼会では、二百人ほど入る会場が観客で満員となり、その中には、バレエダンサーのニジンスキーもいて、舞い手の爪先にある静かな動きに、視線が当てられたそうである。[25]内藤は、「来会したフランス人の中には、まるでグレゴリー聖歌を聴くようだとまじめに言った人がいた」と回想し、[26]ペリの追悼記念会は、能楽を媒体とする形で日本とフランスの深い交流の場になったことがうかがえる。

おわりに

宣教師として来日し西洋文化を日本に伝えながら、次第に日本文化や能楽の本質を深く追究したノエル・ペリは、鋭く純粋な感性の持ち主であったのだろう。晩年まで継続して能楽研究に専念した情熱は、彼を偲ぶ多くの著述からも知ることができる。自ら謡や囃子を実演することができたペリが、ハノイへと渡り、実際の能楽に触れる機会がなくなったことは、非常に残念である。もし日本に定住していたとすれば、その後、能楽文学研究会において展開した拍子論争や謡曲の採譜など、能楽の音楽研究にも大きく貢献したことが考えられる。

今回の調査により、ペリは、近代の日本にとって価値のある人物であるという確信を深めた。今後は、能楽研究に寄与した彼の成果をさらに検討したい。

末筆ながら、資料紹介ならびに写真掲載を許諾くださった、東京藝術大学音楽学部大学史史料室および日仏会館図書室に感謝申し上げます。

参考文献

池内信嘉『能楽』能楽館、第二巻、一九〇四年。
池内信嘉『能楽』能楽館、第三巻、一九〇五年。
井畔武明訳『ノエル・ペリー能』桜楓社、一九七五年。
佐野仁美『ドビュッシーに魅せられた日本人―フランス印象派音楽と近代日本』昭和堂、二〇一〇年。
久米美術館編『久米邦武と能楽展：岩倉具視の能楽再興を支えた人物（ブレーン）：資料集』久米美術館、二〇一四年。
日仏会館編『日仏文化』日仏会館、新第九集、一九四四年。
日仏会館編『日仏文化』日仏会館、新第一〇集、一九四六年。
古川久『明治能楽史序説』わんや書店、一九六九年。
内藤濯『星の王子パリ日記』グラフ社、一九八四年。
内藤初穂『星の王子の影とかたちと』筑摩書房、二〇〇六年。
森茉莉『記憶の絵』筑摩書房、一九六八年。
Peri, Noël. Le Nô. Tokio : Maison Franco-Japonaise, 1944.

注

（1）古川久『明治能楽史序説』わんや書店、一九六九年。
（2）杉山直治郎「ノエル・ペリーの生涯と業績」『日仏文化』新第九集、日仏会館、一九四四年。
（3）杉山前掲「ノエル・ペリーの生涯と業績」（一九四四年、五四頁）
（4）「仏学会」は、フランスの法学者ボアソナードにより創立され、その機関紙は、彼が帰仏した後、森則義に引き継がれた。
（5）哲学者であるメートル（一八七六～一九二五）は、日本学の開祖の一人でフランス極東学院長を務めた後、パリ日仏協会に貢献した人物である。マルケ・クリストフの「雑誌『Japon et Extrême-Orient／日本と極東』と一九二〇年代フランスにおける日本学の萌芽」『日仏文化』（第八三集、二〇一四年、八四～八五頁）による。
（6）一九〇九～一九一三年に発表された論文（邦名「能研究入門」と「五つの能」）は、メートルによって一九二一年パリのボッサール社から普及版単行本「Cinq nô : drames lyriques japonais」として出版された。
（7）ペリの作成した教材に『オルガンピアノ練習曲』一九〇五年、『オルガンの友、新選簡易オルガン楽譜』一九〇六年、『楽式一斑』時期不明、などがある、杉山前掲「ノエル・ペリーの生涯と業績」（一九四四年、三七頁）による。
（8）公演費用は、出演した渡部康三氏の兄渡部朔氏によって提供された。
（9）歌劇研究会による全三幕の日本語歌詞は、近藤逸五郎『歌劇オルフォイス』（東文館、一九〇三年）に載せられている。
（10）局外生「歌劇オフォイスを観る」『帝国文学』（一九〇三年九月号、一一八頁）
（11）杉山前掲「ノエル・ペリーの生涯と業績」（一九四四、七一頁）
（12）田辺尚雄「ノエル・ペリー先生の追憶」『日仏文化』新第一〇集（一九四六年、一五頁）
（13）小松耕輔『歌劇羽衣』修文館、一九〇六年。
（14）田辺前掲「ノエル・ペリー先生の追憶」（一九四六、一三頁）
（15）池内信嘉「能楽の研究家ノエル・ペリー氏逝く」『能楽旬報』（第三巻一四号、一九二二年、一四頁）
（16）ノエル・ペリ「能楽に就ての所感」『能楽』（第三巻一号附録、一九〇五年、一三頁）能楽文学研究会日本語講演の速記によるものである。
（17）池内信嘉「雑報」『能楽』（第二巻一二号～第三巻一二号、一九〇四～一九〇五年）において、能楽文学研究会の活動が記録されている。
（18）池内信嘉「雑報」『能楽』（第三巻一一号、一九〇五年、六一頁）
（19）如水生「ノエル、ペリー氏と語る」『能楽』（第二巻八号、

一九〇四年、二八〜三〇頁）

(20) 田中正平に師事した北村季晴は長唄囃子とピアノ・オルガン・ヴァイオリン・クラリネットの和洋折衷による一ヶ月公演が実現した。（奥中康人「和洋合奏道成寺―北村季晴による日本音楽改良と挫折―」『名古屋芸術大学研究紀要』（第二八巻、二〇〇七年、三三七〜三五二頁）

(21) ノエル・ペリ「能楽は日本文学の最大なるものなり」『能楽』（第二巻六号、一九〇四年、二五〜二七頁）より抄出。池内信嘉の聞き書きによるものである。

(22) 杉山前掲「ノエル・ペリーの生涯と業績」（一九四四、一三三頁）

(23) 内藤濯『星の王子パリ日記』（一九八四年、一二六〜一二七頁）

(24) 父内藤濯の回想を伝えた内藤初穂の『星の王子の影とかたちと』（二〇〇六年、一九七頁）に記されている。

(25) 山田珠樹の妻として追悼記念会に同行していた、森茉莉の『記憶の絵』（一九六八年、一八一頁）による。

(26) 内藤前掲『星の王子の影とかたちと』（二〇〇六、一九九頁）